

2019年1月19日(土) 15:00-17:00

参加：18名

司会・文責：堀越

1. 概要：

- ・初参加者4名を含む総勢18名で、主に、権利とは何か、義務と不可分のものか、どうやって生まれたのか、を対話し、考えた。

2. 対話：

(0) 問いの提起：

- ・前々回の差別というテーマを受けて、差別を考える際に不可欠であった権利を考えたいという背景を説明するために、今回は「権利とは何か？」という問いを提起した。

(1) 権利とは何か？

- ・権利とはももとは弱い立場の人々のためのものではないか？
- ・普段あまり権利を意識しないが、日常で意識するのは、弱者の権利が侵されるときに人々から注目される場面、あるいは、教科書や書籍等で勉強をしている場面である。
- ・日産のゴーン元会長の拘置の例を見ると、(国家) 権力には被疑者を拘束する権利もあると思う。
- これは権限である。権限は与えられるもの、権利は備わっているもの。両者は区別すべきである。
- ・人間以外の動物には権利という概念を持つものはない。
- ・権利とは、取引の材料ではないか。いやむしろ、所有権を例に考えると、権利は、交換取引においてツールというか前提条件になっている。
- ・人の歴史を振り返れば、基本的人権は最初から備わっていなかった。弱肉強食社会では強い者が多くの配分を得ていたが、やがて平等の意識が芽生えて、権利を勝ち取り、作り上げたのではないか。

(2) 権利は義務と不可分のものか？

- ・権利は生まれながらにして持っているという設定である。
- ・販売権を考えるとき義務がある。義務がなされない権利はない。権利と義務は不可分ではないか。
- これは、権利ではなく、権限であるため、別の議論である。
- ・目の前にあるこのコップと水を考えると、これは初めから私が飲む権利を与えられていた訳ではない。(哲学カフェの予約をしてここへ来て会費を払ったから) 目の前にある水を飲む権利がある。やはり権利は義務とセットなのではないか。
- (行使できる、できないという区別はあるが) 所有できる権利は初めからある。コップの中の水の所有権は、諸条件(お店に入って何かを注文する)が揃うまでは行使できないが、揃えば行使できる。
- ・義務と一体になっている権利もあるがそうでないものもある。LGBTの権利、赤ちゃん(新生児)の権利、生きる権利等である。
- ・(基本的人権を考えるときに) 仮に、憲法はなくても権利はあると言えるのか？
- 憲法がない時代に、最初に「基本的人権をある(人々に備わっている)としようよ」とその時代の人々が考えた。その後で、その人権を永続的に保障するために憲法を作ったのではないか。
- この「あるとしようよ」というときは一体どういうことが起きたのか。これが憲法なのではないか？
- ・権利は一人では要らない。無人島にいる一人の人間には権利というものは不要である。
- ・義務のない権利はあるとは思いますが、生きる権利を考えてみると、殺すことは生きる権利を奪うことになり、殺してはいけないという義務が生まれる。だから義務と権利はセットではないか。
- ・中国では、生まれた地域で権利が異なる例もあり、権力者が決める。だから、初めから備わっている訳ではない。
- ・権利は義務とセットであるという意見が出たが、その根拠を示して欲しい。憲法には「権利は義務を果たさないといけない」といった記載はないはずである。

(3) 権利はどうやって生まれたのか？その1～「正しい」との関係

- ・権利は漢字を見ると「権」と「利」に分かれるが、利とは自分にとって良いということではないか。
- ・「生きる権利」とは「生きる」ことを正しい、善いと思うから、権利であると考えてるのではないか。
- ・人権(に相当するもの)を持っている人と、持っていない人がいた。そこで、持っていない人がこの差(=人権)に気付いた。これでは、理屈として通らない。どうすべきか。どうすることが正しいかと考え、人権を誰にも備わっていると思うようになったのではないか。
- ・社会が存続するのに、利点があるから権利という概念が生まれたのではないか。
- ・権利という言葉は英語で「Right」。正しいという意味もある。持っていなかった弱者が、持っていることの方が正しいと思ったのではないか。
- 持っていない人々が持っている人々に対して不平等感を抱き、「自分達にも与えて欲しい」と思うようになって、その存在(=権利)に気付いたのではないか。
- ・正しいとは何か？ これを考えることが、義務へと繋がっていくのではないか。

(4) 権利はどうやって生まれたのか？その2～社会との関係

- ・皇帝ペンギンの群れの例を挙げたい。極地で寒いから暖を取るために集団で固まるが、時間が経つと群れの最外周の個体は入れ替わって内周に入らないと死んでしまう。そうなるとどんどん群れの母数が減ってしまい、集団として損となる。そうならないように、群れ全体としては順々に最外周の個体が内周へ入れ替わるように入れ替わりの循環を繰り返すようになる。これは、集団としてどの個体も等しくいる方が得であるという例ではないか。
- ・生得的に与えられていると考えることはなかなか難しい。
- ・権利というものを普段あまり考えていない。私達の生活に含まれているとは思いますが、その存在が必要であるとは思っている。
- ・新しい権利を得られる(自覚する)と「権利がある」ことを良いことと思える。一方で、あることが当たり前になると何が権利かが分からなくなる。
- ・社会の状態によって法律は変わる。だから時の権力者が権利を決める。
- ・時の権力者が人権を守らなくても人権は(生得的に備わっているから)永遠に変わらない。だから、守らなくてはいけない。
- ・原始の時代に皆が殺し合う社会があって、そのうち殺し合うことはダメと考えるようになり、ルールや枠組みが必要となってそれらができてきて、できることおよびできないことを決めていったはずである。この「できること」が権利なのではないか。

3. まとめ：

- ・テーマ提起者としては「権利は正しさ(の概念)と関係あるのではないか」という指摘は発見であった。だが、そこからさらに掘り下げるには時間切れになってしまったので、そこは今後読者の黙考に委ねたい。

以上